

【小学校 算数科】

全ての子どもが「わかる」「できる」を実感できる授業づくりを目指して

11月28日(金)に、「子どもが伸びる授業づくりプロジェクト(小学校算数)」公開授業及び研究会が、米子市立福米東小学校で開催されました。研究会の中で、2年間の研究の取組を御発表いただきましたので、その一部を御紹介します。



研究の柱1

育成する資質・能力や「数学的な見方・考え方」を明確にして単元を構想する。

米子市教育委員会作成の「授業づくりシート」を活用し、**本時で身に付けたい資質・能力や数学的な見方・考え方**について、授業者自身が意識して取り組めるようにしました。

また、シートの中に「**適用題**」の欄を設け、児童一人一人が本時で身に付けた力で取り組む問題についても再考しました。



研究主任

授業づくりシート

6年2組 教科 算数 単元名 データの整理と活用② 授業者

問題
赤と黄の2チームから代表を決めよう。

この時間でつけたい力（資質・能力）
ドットプロットの考察を通して、データの散らばりの様子をもとに、データの特徴を見いだすことができる。

この時間に働きかけたい数学的な見方・考え方
データのちらばりに着目した見方を働きかせる。

「まとめ」にかく言葉
ドットプロットに表すと、データの散らばりの様子が見え、特徴や傾向がわかりやすくなる。

この「まとめ」をひきだすために…
何について練り上げるか。（何に焦点を絞って話し合うか）

データをドットプロットで表すと、どんなことがわかるか
一番多い値（最頻値）、最大値、最小値 散らばり方

そのためにどのような「めあて」（課題意識・問い）が必要か
別の見方はできるかな？
○ドットプロットで表すと何がわかるのか。

「めあて」にかく言葉
データを図であわらすと、何がわかるだろう。

この「めあて」（課題意識）をもたせるために…
どのような導入をするか。（問題把握、見通し）

平均値では決めづらい。
色々なデータをならしたことでできなくなったこと。

どのような適用題をするか。（練習）
青組のデータをドットプロットに表し、青組の散らばりのようすを捉える。

- ★全ての子どもに学びが成立しているか
- ★今考えるべき問い合わせ子どもたちに明確になっているか
- ★それは子どもたちにとって考えたい問い合わせ



めあては子どもたちに中にある
「問い合わせ」をもとにする

「～の方法を考えよう」 「～するにはどうしたら
「どんな関係か調べよう」 いいだろう」

行動が目標



課題との出会いの中で生まれた「問い合わせ」を
めあてにつなげる

研究の柱2

児童一人一人の学習状況の見取りに基づき、適切な指導や支援の工夫・充実を図る。

【講師 明星小学校 笠井 健一 氏 指導助言内容より】

子ども全員が「わかる」「できる」ためには、先生は教材研究し、目の前の子どもたちの実態もふまえて、焦点化しながら授業をつくりていきましょう。先生方御自身の経験年数等もふまえながら、①②③それぞれ目指すところを定め、取り組んでみましょう。



- ① まず先生が、分かりやすく説明できること。
- ②-1 つまずいている子どもも、困っている子どもを見つけること。
- ②-2 困っている子どもが何に困っているのか、教材研究に基づいて理解できること。
- ②-3 そのことに基づき、何をしたら子どもはできるようになるのかを知っていて、実践できること。
- ③-1 子どもの不十分な説明に対して、困っている子どももなら分からぬであろうことが分かって、その立場に立って質問すること。
- ③-2 そのことを通して、分かりやすい説明とは、どういう説明なのか、クラス全員が分かること。



第1学年「ひきざん(2)」

2 ブロックを使って解法を考える。(個)

C1	Cの児童の様相の想定で終わるのではなく、どうしてそのような様相に至るのかという <u>困り感の「もと」</u> を想定し、 <u>支援を考えました</u> 。
C2	指導案上では、展開前半の自力解決場面に、児童の様相と支援の具体を記載しました。
C3	め動かす数が違う。
C4	問題文の意図が理解できおらず、ブロック操作ができない。
C5	ブロックから引くことはできているが、一つずつ引く、数え引く方法をしている。
C6	13から3引いて、残りの6を引く、減算法をしている。
B	10のまとまりを作つから9を引き、1と残りの3を足す、減加法をしている。
A	数え引く方法、減算法、減加法の中から、なぜ減加法で解いたのか自分の考えをもつて。
	*なぜ10のまとまりから9取ったのかを問うことで、減加法の手順の簡潔さや分かりやすさ、既習とのつながりを意識しやすくなる。